

かわらない人もいる。顔をみてもわからず、出席者署名簿に記入された氏名を見てはじめて顔と氏名が一致した人もいた。出席者は来賓としてお招きした先生方を含めて135名であった。A君の司会でパーティーはとどこおりなく終了した。パーティー終了と同時に自然発生的にクラス会の呼びかけが相次いだので、会場の後始末をしたあと、別の会場で開かれた三年生のときのクラス会に出席してみた。今は都庁につとめておられる担任の先生を囲んで、各人の歩んだ道が被露され、それぞれの持場で中堅として活躍していることがよくわかり、大いに啓発されるところがあった。

去年の暮れには中学校の同窓会も開かれ、旧交をあたためることができた。今年いただいた年賀状には同窓会をそろそろやろうではないかと書かれてあるものが二つあった。一つは大学の教養課程時代のクラスの友人から、いま一つは学部3、4年生の頃のサークルの友人からである。どうやら我々の世代も同窓会を必要とする年齢に達したということのようである。

## フィールド・ワークの必要性和楽しさ

斎 藤 功

歳末の隠岐には春の木と呼ばれる椿の花と撫子の可憐な花が咲いていた。椿、白槿、ツワブキ、ハゴロモヒトツハ等がみられる隠岐の沿岸集落は伊豆の沿岸集落に酷似し、黒潮の影響をうける照葉樹林文化圏の一部であることを私に印象づけた。しかし、詳細にみると、チシマザサの小群落の存在と暖冬にしては早い初雪とが私に隠岐の島々が日本海に浮かぶ島であることをしらせてくれた。

隠岐の牧畑を調査したいという私の短年の夢をかなえてくれたのは「集中豪雨に伴う崩壊が常畑（開地：ケエチ）に与えた影響」を島前の中ノ島（海士町）、知夫里島（知夫村）で調査する友人の好意によるものであった。アワビ、イカなど新鮮な海の幸を賞味し、夜のふけるまで友人と酒くみかわし、隠岐島の成因、沿岸集落の諸相、牧畑の位置づけなどをわずかな知識に想像力を交えて話し会うのは、それがマンガチックで、独断と偏見に富んだものだけに忘れ難いものであった。

牧畑の遺構は松や杉の林となっている山林が急斜面にもかかわらず段畑状になっており、現在でも島民でありさえすれば、家畜の放牧権を有するため、山地のいたるところに垣が設置され、林間放牧が実施されている事実からうかがわれた。現在でも利用形態は異なりこそすれ、清水牧・高田牧・空牧・中牧・崎山牧（海士町多井・崎地区）・居島牧・西牧・中牧・東牧（知夫村）などの厳然たる牧区が設置され、輪転式に利用されているのである。たとえば、昔の牧畑について老人（77才）にきいてみると、

「ワシの若い時分には、この地区の山は殆んど牧畑で木もなく、垣にする木材は焼火山まで船でとりに行ったもんだ」。つまり、島前の中央火口丘と思われる焼火山は外輪山である中ノ島、知夫里島、西の島の垣材供給地であり、その利用区分もはっきり画定されていたという。だから、

「ワシが子供の時分にはこの山は殆んど耕作されており、家畜は地主さんから借りていたんだ。借り料は『足一本』といってな、4頭の仔牛が生れてやっと1頭が自分のものになるんだ。それに多くの宅地や山も地主さんのものであったから、牧畑を耕した収穫物の3/4は地主のもんだった。地主の

ところから自分の食うものをもってくるために海に出たんだ」「すると地主の力はすごく強かったんだね」「そうさ地主さんはお城のような館に住む殿様で、この地区の殆んど全部、知夫里島の6割はもっていたんだ。」と教えてくれた。

牧畑が四圍に分かれ、刈り跡放牧などをしていたのでヨーロッパの三圃式農業に類似していたのではないかと予備知識を入れて調査にでかけた私は、以上のような話をきくにつけ、牧畑が村落共同体というようなユートピア的平等社会ではなく、南部や中国山地にみられた半隷属的な名子制度の名残りではないかと考えるようになった。この経験は昨年秩父の山村、栃木や四国の奥地山村、椿山で感じた以上に私に自分の目で、自分の頭で考えるという地理学者の原点であるフィールド・ワークの必要性和楽しさを教えてくれるものであった。

## 共 稼 ぎ 27 年

貝 山 久 子

昭和26年に結婚したので27年間共稼ぎを続けて来たことになる。結婚前から私は出来るだけ仕事を続けたい希望をもっていたが、夫は大正の人間らしく最初は私が家に居ることを望んでいた。しかし昭和25年に引揚げ後の無理がたたって父が亡くなり、長男である夫は母と弟妹を扶養せねばならなくなったので、一家の経済を支える為にも私は働かねばならなかった。昨今は共働きというのが一般的なようだが私はこの言葉が好きではない。経済的な理由で妻が仕事をもつことは、別に羞ずべきことでも何でも無いと思う。当時の姑の年令が現在の私の年令より低かったことを思うと感無量である。

こうして妻であり嫁でもある結婚生活がはじまった訳であるが、私は子供が生まれたら数年は育児に専念したい希望をもっていたので、仕事と経済状態のかね合いを考え、中々決心が付き兼ねていた。“子供の面倒はみてあげるから私の体力のある中に産みなさい”と云ってくれたのは外ならぬ姑であった。姑の真意は定かではないが、経済的な理由の外に、一つ屋根の下で暮すことから起きるトラブルを回避しようという考えが働いていたのではないだろうか。私も勿論そのことは十分すぎる程身にしみていたので、あえて自説を枉げて昭和31年に長女を、昭和34年に次女を出産した。しかし、当時文教育学部では既婚の助手は私1人であったから、産休の制度が確立していたわけではなく、ましてや産休要員などはのぞむべくもなく、肩身の狭い思いをしなければならなかった。家はおむつのとれるまで通いのお手伝いをたのんでしのいだ。その間妹と弟が結婚し、一応長男の嫁としての責任は果たしたのであったが、そのころには私が勤めをもつことは、既定の事実として受け止められるようになっていたように思う。

このようにしてふり返ってみれば長い道程を今日まで来たわけであるが、何と云っても与つて力あるのは、家族全員が健康なめぐまれていたことと、姑の協力であったと云えよう。しかしその間完全に平穏無事だったわけではなく、子供の病気やケガ、夫と私の入院、姑の再度の入院と死などのアクシデントが我家をおそった。また私はいつも家に居て針仕事をしたりお菓子を焼いたりする母親のイメ